



面白さ、
やりがいを
専門の先生から

研究者

インタビュー

Interview
×
researchers

教育学部(教育学)系統

この学問の魅力!

国立 東北大学

教育学部 教授
甲斐 健人先生

(かい たけと)福岡県生まれ、広島県で育つ。筑波大学体育専門学群卒業後、同大学院体育科学研究科単位取得退学。愛知教育大学教育学部助教授、奈良女子大学准教授などを経て、2013年4月から東北大学大学院教育学研究科教授。著書に『高校部活の文化社会学的研究』(南窓社)、編著書に『サッカーのある風景』(晃洋書房)などがある。実技の専門種目はサッカー。



学校教育にとどまらず 人の一生を広く対象としてとらえ 未来の社会を作るのが教育

スポーツ社会学とは
どのような分野ですか?

私の研究分野である「スポーツ社会学」は、比較的新しい領域ではないかと思っています。私は、スポーツそのものの研究というよりは、スポーツと関わる人々を通して、社会とはどのようなものか、生き方の多様性はどのような工夫によって確保されようとしているのか、について考えています。

皆さんは「あるべき生き方」を押し付

けられるような圧迫感を覚えたことはありませんか。「いろいろな生き方があっていい」と言われながらも「リスク」を考えると一定の枠から外れられない窮屈さといってもいいかもしれません。明治時代以降の学校教育の成果とも言えますが、良くも悪くも多様性を感じづらい状況が生まれてきたと思われれます。その中で、身体は規律化の対象となっていくます。

大学入学後に、1年間ブラジルに滞在しました。サッカー選手としての成功を夢見る貧しい子がいるかと思えば、

部活動について
先生はどうお考えですか？

有望な人が若くしてパツとやめてしま
うなど、海外経験を通していろいろな
生き方があると知りました。人種の多
様な国での経験も、その後の研究につ
ながっています。

以前、『高校部活の文化社会学的研
究』という本を出しました。これは、
高校3年の1月までラグビーを続ける
人たち、過疎山村でスキーとかかわり
ながら生活する人たち、農業高校で
細々とサッカーに取り組む人たちを対
象にしたフィールドワークの成果です。

ある進学校のラグビー部員たちは、
受験本番の時期まで競技を続け、その
結果浪人しても構わないと考えていま
した。彼らは大学をラグビーで選ぶの
ではなく、将来のことを考えてこうい
う勉強がしたいという視点で選んでい
たのも印象的です。

ある農業高校のサッカー部員たちは、
友達づきあいやアルバイトを理由に部
活を休むことがありました。彼らにと
っては、部活が生活の中で優先順位
の最上位とは限らないのです。

このように、部活でスポーツをする
高校生にもさまざまな考えや組み
み方があるということに気づかされまし
た。

皆さんも、高校で部活動をしている
人が多いと思います。部活動と一口に
言ってしまうと多様性が見えにくくな
りますが、実際は、種目の違いだけで
なく「厳しそう」「楽しそう」といったこ
とも含め、部活動は多様であるとい
うことが改めて認められてきているの
ではないでしょうか。

私は、部活動は部員たちが自ら考え、
挑戦することが許される場所であって
ほしいと考えています。勝利を目指し
て考え実際に身体を使って取り組んで
みる、そしてその結果が敗戦だったと
しても、それはゲームでの出来事で、
それ以上の責任は問われない。こうい
う部活であれば、とにかく与えられた課
題を早く正確に解くことが求められが
ちな学校教育の中で、失敗することが
許される有意義な時間となるのではな
いでしょうか。身体を通した会話のた
めの共通理解が勝敗だとすると、たと
え負けても会話した体験は残ります。

また、真剣に部活に取り組もうとす
れば、自分の身体に目を向けざるを得
ません。自らの身体に目を向け、その
「改善」を試みる経験は、長い人生を過
ごすために貴重な体験ではないかと思
っています。

中には、高校を卒業した後もプロや
実業団で競技を続けたいと考える人も
いるでしょう。現実にトップアスリー
トとして生活できる人は非常に少数で
すが、スポーツに関わりたいと考える
高校生が、メディアに登場するような
トップアスリートにあこがれる仕組み
が出来あがっていると思います。

さて、スポーツをする前提として、
その人が暮らしているということを確認
しておきたいと思います。人は地域
社会で生活している。子どもが部活や

地域スポーツクラブで生活を充実させるためにスポーツをする。その中から秀でた人が選抜され、場合によっては地域を離れ、ごくまれに「一流」になって生活の糧を得る。それはそれで喜んであげればいいし、キャリアを終えて地域に戻ってきたら迎え入れてあげればいいと思います。一方で、生活を楽しむツールのひとつとして各自の好みに合わせてスポーツと関わる(そういう暮らしができる)ことが原点であるという認識を持つことが重要ではないかと思っています。

東北大教育学部は どのような特徴がありますか？

教育学部というと、学校の先生になるための学部というイメージが強いと思いますが、東北大学教育学部では、人が生まれてから亡くなるまでの期間を広く教育の対象としてとらえ、人々の変容やそのための仕組み、働きかけなどについて、幅広い領域から学ぶことができます。

学生は全員が教育科学科に所属し、1年次は主に他学部の学生と一緒に幅広く教養教育を受講し、後期からは専門教育も始まります。2年次半ばに教育学コースか教育心理学コースを選択し、3年次半ばに指導教員を選択して卒業研究の準備を進めます。専門教育では、教育哲学、教育史、人類学、教育社会学、教育行政学、社会教育、スポーツ文化論、教育心理学、発達障害

学、臨床心理学、教育評価測定論、教育情報デザイン論など多様なアプローチで教育について学びます。ICTに代表されるロボット工学を取り入れた教育のあり方を模索する先進的な取り組みも始めています。また、海外留学の制度もあり、多様な生き方に触れるチャンスも用意しています。

受験生へのメッセージを お願いします

教育とは人を育てることであり、結果的に未来の社会を作ることであります。社会のすみずみに教育作用は浸透しており、時として、教育は権力性を帯びることもあります。私たちの社会をより良くしていくために不可欠である教育を理解するためには、多様な視点からの問題発見や制度設計、教育実践などが必要になっています。

教育を、人々の生きる過程に影響を及ぼす現象と考えると、さまざまなテーマを学ぶことが可能です。人に影響を与えるということは、教育のエキスパートには多様な人の生き方を認められる姿勢が求められるのではないかと思います。その意味で、多様な価値観へ開かれた姿勢を持ちたいと思っている人にぜひ教育学を学んでほしいと思います。

スポーツを通して多様な生き方を模索している人、人間を言語以外の情報も含めて理解したいと考えている人にもぜひお勧めしたいですね。